

保母の顔

坂内ミツ

フレーベル館のタイムスに倉橋先生の御話「幼児の顔」といふのが巻頭にありました。其最後に「さて、幼児は私どもの顔をどう見るか」に至つて私の眼は紙面にこびりついた。そうして今も其言葉を心の中に繰り返して居る。今更顔の造作を換へて貰いたいと願つても叶はぬ相談、せめて心の平和によつて恐は氣な眼もおだやかに、心の笑によつてこわばつた顔にも愛嬌のあるやうに、心のうるほひによつて高い鼻も低く見て貰うより外はない。幸にも幼児は其造作を見ようとはせず、心持ちを躊躇の上大人の觀方とは大に違うのであると、獨りきめにして自ら慰めて居つた。實際家庭の心配も社會の出来事より受ける影響も幼児の顔を

見るとして姿を消し、たゞ～幼児の顔のみでいっぱいであるのは保母の幸福なる第一である。處が困つた事件が突發した。それは小學校検定の發表の日である。一番に發表になつたのは大塚である五人に一人合格の割合であるから不合格者のない筈はない。其合格者と不合格者の母親が同時に幼児の居る時間中に訪問される事である。狭い幼稚園では應接室として一室も二室もとつておくわけに行かない。扱て一方の母親には御芽出度うと挨拶してニコ～せねばならぬ。實際自分もうれしい處が一方の母親に對してはお氣の毒でたまらない。殊に自分が自信して居た幼児のおちた場合涙なしには居られぬ。殊に自分が同じ位の年齢の子を持つて居る母として、不合格の悲運に泣いた経験を持つて居る身には同情せずに居られようか。一年も二年も目をはなさず、觀察もし、育てもしたあの個性を充分發揮するひまもなく、僅

か三分の検定によつてかくも親と子を不幸にした
か（大きい意味では幸福かも知れぬか）と思ふと
泣かずに居られない。先生に申譯ない事になりま
したと詫びられるのは不平を訴へられるよりも尙
つらい。さてこの顔を幼児は何と見るであらう。

合格した児と不合格な子と手をとり合つて遊ん
で居る時、保姆の顔を見て先生僕おつこちちやつ
たと飛びついで来る幼児を抱き上げて、頬ずりす
る内にも眼はうるまぬかと氣づかはれる。一方合
格した児に御芽出度うといふにもあたりを憚らね
ばならぬが、同時に保姆の喜ぶ眞剣味を味はせ度
い感情に走るのは悪いか冷淡と思はせるのは尙惡
い。そうして尙慢心を起させぬやうにせねばなら
ぬ。此内心の苦勞は自然面にあらはれる。如何に平
靜を裝うても鋭い幼児は見ぬきはせぬかさてこの
顔を幼児はどう見るであらう。

次ぎ～～と發表の日は来る。十校に近い發表の

時毎にこの四つの心がこんがらかる。この心を充
分に先方に通じ得てしかも平靜であらねばならぬ
あゝむづかしいものは保姆の顔である。

